

## 第二章 母

星の子は木こりとその家族と暮らしましたが、星の子は彼らとはとても違っていました。

毎年、星の子はより美しくなりました。

星の子の肌は象牙のように白く、髪はラップズイセンのように金色で、唇は赤い花の花びらのようであり、瞳は川のほとりに咲いているスマレのように青色でした。

村の他の人々は黒い髪の毛と黒い瞳をしていて、彼らは星の子を驚きのまなざしで見つめました。

星の子はとても美しかったのですが、とても冷酷で、傲慢で、そしてわがままでした。

星の子は村の他の子どもたちを笑って、「お前たちの親は貧しいけれど僕は気高い、僕は星から来たのだ」と言いました。

星の子は、貧しい人々に対して哀れみの気持ちを持ちませんでした。

星の子は醜い人々や病気の人々を笑いました。

彼は動物たちを傷つけて、動物たちが苦しむと笑いました。

星の子はともうぬぼれが強く、自分の美しさが大好きでした。

夏には、星の子はしょっちゅう牧師の果樹園にある井戸に行っては、水面に映った自分の顔を眺めました。

そして、星の子は満足でした。

木こりとその妻は星の子を大事にしましたが、彼らはとても悲しい気持ちでした。

彼らはよく、「私たちはお前によくしてきた。私たちはお前に対して哀れみの気持ちを持った。どうしてお前はそんなに冷酷なのだ？ どうしてお前はこんな風に振る舞うのだ？」と星の子に言いました。

牧師はとても心配して、「お前はあらゆる神の生き物を敬わなければならない。ハエでさえもお前の兄弟なのだ。どうしてお前は他人に苦痛をもたらすのだ？」と星の子に言いました。

しかし、星の子は聞く耳を持ちませんでした。

星の子は動物たちを痛め続け、他の人々の問題を笑い続けました。

星の子は美しく、踊ったり音楽を作ったりすることができたので、他の子どもたちは星の子に従いました。

彼らは星の子の命令に従いました。

星の子は彼らのリーダーで、彼らは星の子のように冷酷で無情になりました。

ある日、一人の貧しいこじきの女が村にやってきました。

女の服は非常に古びて破れており、足には靴を履いていませんでした。

女はとても疲れていたもので、休むために一本の木の下に腰を下ろしました。

星の子は女を見て、「あの醜い女を見ろよ。僕たちは彼女にここにいてほしくない」と友人たちに言い、彼らはその貧しい女に向かって石を投げ始めました。

女は怯えましたが、星の子を見ることを止めませんでした。

木こりはこれを見ると、「お前たちは何をしているんだ？」と叫びました。

「すぐに止めなさい。どうしてお前はこの気の毒な女性に対する憐みの気持ちを持たないのか？」

「僕はお前の言うことなんか聞かない。お前は僕のお父さんじゃない」と星の子は答えました。

「確かにその通りだが、俺がお前を森で見つけたとき、俺はお前に哀れみの気持ちを持った」  
年老いた女は話を聞いていましたが、これらの言葉を聞くと叫び声を上げて気を失いました。

木こりは女を自分の家へ運び、妻は女のために肉や飲み物を食卓の上に置きました。

しかし、女は食べも飲みもしませんでした。

女は、「この子は森から来ましたか？ この子は星柄の金色の外套を身に着けていましたか？

これは10年くらい前に起こりましたか？」と尋ねました。

木こりはとても驚きました。

「ええ」と木こりは答えました。

「それから、子どもは首の周りに琥珀の鎖をしていましたか？」

「ええ、していました」と木こりは言いました。

「私と一緒に来てください、あなたに外套と鎖をお見せします」

女はこれらのものを見て、喜びのあまり泣き出しました。

「あの子は私の小さな息子です。私はあの子の母親なのです」と女は言いました。

「10年前、私はあの子を森で失って、世界中であの子を探しました。今、私はあの子を取り戻しました」

木こりはとても驚いて、少年を呼びました。

「家の中に来なさい、そうすればお前のお母さんに会えるだろうよ」

星の子は大変喜んで、走って入って来ましたが、女を見ると、「僕のお母さんはどこ？ 僕には誰も見えない、気味の悪いこじきの女しか見えない」と言いました。

「私がお前のお母さんだよ」と女は言いました。

「お前は気が狂っている。僕はお前の息子じゃない。お前は古びた服を着ているし、お前はこじきの女で、僕は星の子だ！」

「でもお前を見たとき、私はお前だと分かったし、お前の金の外套や琥珀の鎖が分かったよ。強盗たちが私からお前を盗んだのだ。私のところにおいて、息子よ。お前の愛は私にとってとても大切なのだよ」

女は星の子に向かって両腕を広げましたが、星の子はとても怒って、女に対して心の扉を閉ざしました。

女は泣きました。

「私が行く前に私にキスをしておくれ、私は世界中を旅して、お前を見つけるためにたくさん苦しんだのだから」

「絶対に嫌だ。お前はとても醜い。ヒキガエルか蛇にキスする方がましだ」

女は立ち上がり、家から出て行きました。

女はひどく泣いていました。

女が出て行くと、星の子はとても満足でした。

星の子はそれから、友達と遊びに行きました。